

身体思想と表現

——闘う身体・記号論・芸術学的可能性——

大山智徳

はじめに

本稿の目的は、闘う身体⁽¹⁾を芸術学の中に定位しようという試みです。闘う身体は痛みや他者が前提であり、また複数の身体を内包しています。その意味では、闘う身体にはさまざまな可能性がありますが、とりわけ、本稿では、闘う身体に芸術学的可能性を見いだそうという試みです。闘う身体を芸術学の中に定位するにはどうしたらよいでしょうか。芸術学においては舞踊する身体はすでに芸術学の対象です。そこで、闘う身体が舞踊する身体と同型であることを証明すれば芸術学の対象になるはずですが。

本稿では闘う身体を「複数の身体技法からなる肉体の自律的な運動」と定義し、この定義が舞踊する身体と同型であることを記号論を援用して証明していきます。

記号論の基礎

記号論を援用するといっても、多様な記号論⁽²⁾が存在します。本稿ではR・バルトの記号論⁽³⁾を基本にしています。基本的にはすべての人間の営みを記号、つまりシニフィアン（以下、SAと表記。）とシニフィエ（以下、SEと表記。）の組み合わせで見ているという立場です。人間の営みにはさまざまな「意味」があり、その意味を解明しようと言うのです。記号論は「意味を担う記号の形式に着目してそれを解明しようとする」⁽⁴⁾方法です。また、記号論は「意味の「解読装置」であると同時に「演繹的な発見装置」であるという側面があります。一度、記号の形式に変換し、それに論理的な操作を加え、展開して、後から対象物を考えるという側面です。本稿では、記号論の発見的装置としての性能をできるだけ発揮させるため、演繹装置として記号論を用います。

本稿で用いる記号論の基本的な概念を六つ素描しておきます。まず、記号という概念ですが、記号はSAとSEから構成されています。SAとは意味するもの、SEとは意味されるものという意味で他に、能記、所記と訳されることもありま⁵⁾す。記号論で言う記号とは、SAとSEがセットです。さらに、記号論は大きな二つの原理から成り立っています。恣意性と差異性という原理です。

恣意性とは、一つの記号を構成するSAとSEとの関係が恣意的だということです。たとえば、／バラ／という音(SA)は「バラ」という概念(SE)と結びつくのは恣意的だという意味です。

もう一つの差異性とは、文字どおり一つの記号は他の記号との差異によって成立するという原理です。たとえば、「バラ」は「菊」、「桜」、「もみじ」ではないという否定の連鎖「……ではない」によって「バラ」であるという原理です。

さて、これまで、記号、SA、SEという概念をソシユールの用法で説明しました。今度はR・バルトによりつつ、デノテーション(以下、Dと表記する。)、コンテーション(以下、Cと表記する。)、メタ言語(以下、Mと表記する。)という3つの概念を説明します。

まず、Dです。「バラ」を思い浮かべてください。この「バラ」が「植物のバラ」である場合、いわば、意味作用を受けていない「植物のバラ」である場合、これがDです。⁶⁾

次にCです。この「植物のバラ」が好きな人に贈られる場合、こ

の「植物のバラ」は「愛の告白」といった新しい意味を担うこととなります。これがCです。つまり、「植物のバラ」というDが「愛の告白」というSEのSAになり、新しい記号の次元になります。

最後にもう一つ、本稿の重要な概念であるメタ言語です。

「植物のバラ」が「バラとは……である。」などのように百科事典に文字や写真等で定義や説明がしてある場合です。このとき、「植物のバラ」というDは「バラとは……である。」というSAのSEとなります。⁷⁾

さて、本稿ではDそのものから説明を始めましたがMあるいはCから説明した方がよいのかも知れません。M、CからDに至る記述の形式、言説の秩序こそが現象学の記述の特徴だと考えています。⁸⁾

この記述形式は認識主体の時間概念と密接な関わりがあります。経験意識によって秩序づけられた記述ということになりますが、この意識という中心によって秩序づけられた言説の秩序を現象学的文体と呼んだことがあります。⁹⁾しかし、この記述の形式は自我という強い曲率を持った文体です。この曲率を部分集合と見なしうる可能性を私は記号論に感じています。つまり、記号論はこの意識による記述という形式を採らず、論理的に再構成された、いわば、数学的・形式的な記述を採用しています。この文体の差異は時間の捉え方と差異があるようです。現象学的文体も記号論的文体もともに時間という順序を内在させていますが、前者は意識による順序によって再

図1

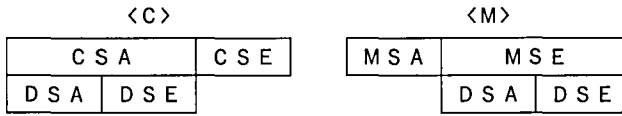
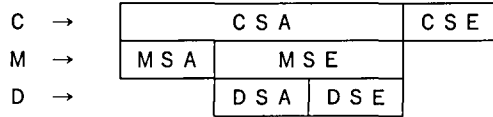


図2 基本的な記号構造



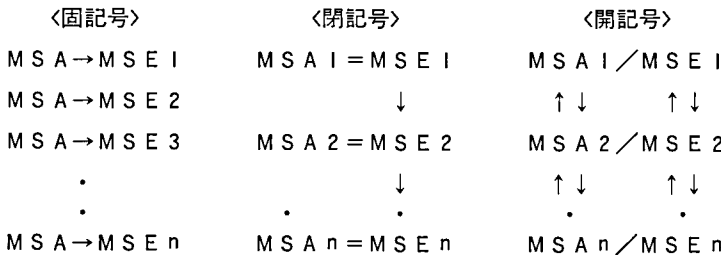
その上に、本稿で取り扱うMの構造を考えます。さらに、そのMをSAとするCを考えます。それを図式化すると上図のようになります。(図2)

つのが本稿で用いる記号論の基本概念です。さらに、記号の基本構造を見てください。CとMは幾層にも組み合わせることができま。その上に、本稿で取り扱うMの構造を考えます。さらに、そのMをSAとするCを考えます。それを図式化すると上図のようになります。(図2)

簡単に図示しておきます。(図1) SA、SE、D、C、Mの5つの概念が本稿で用いる記号論の基本概念です。さらに、記号の基本構造を見てください。CとMは幾層にも組み合わせることができま。その上に、本稿で取り扱うMの構造を考えます。さらに、そのMをSAとするCを考えます。それを図式化すると上図のようになります。(図2)

構成、再編制された時間で後者は論理的順序によって再構成、再編制された時間ではないでしょうか。SAとSEの関係で言うと、DがSAを構成するのがCで、DがSEを構成するのがMということになります。本稿では、DのSAとSEをそれぞれ、DSA、DSEと表記します。また、MのSAとSEをMSA、MSEと表記し、CのSAとSEをCSA、CSEと表記します。

図3 記号の三様相



あるため、外部を求めるとい。 (図3)

次にMSAとMSE、DSAとDSEが双方向交流する閉じた関係の記号を閉記号と呼びます。最後に、MSAとMSE、DSAとDSEとが無関係で、他の記号と切断、接合する開かれた記号を開記号とします。この記号の原理は常に差異にあります。この記号の原理は常に差異があります。 (図3)

まず、MSEが変わっても記号の構造が不変な記号を考えます。MSAからMSEとの関係が一方向で、非対称な記号です。これを固記号と呼んでおきます。

記号の三様相
本稿では記号の基本構造の中でもMのレベルに着目し、つまり、MSAとMSE、DSAとDSEとの関係から固記号、閉記号、開記号という3つの理念型を作りました。⁽¹⁰⁾

記号と時間について

ここで、記号と時間の関係についての考察が必要となってきました。⁽¹²⁾ 経験的には記号と時間の関係は自明なように思えますが、記号には特別な考察が必要です。記号論は時間さえも記号として考察できるからです。実際、時間をSEとするSAの研究は多様です。⁽¹³⁾

そこで、記号と時間の関係について、包含関係で考えてみます。記号と時間を包含関係で考えると3つの論理的可能性があります。一つが記号は時間の部分集合という場合、もう一つが時間が記号の部分集合という場合、もう一つが記号と時間は等しい集合という場合です。⁽¹⁴⁾

この記号と時間の関係をそれぞれ考察します。

まず、記号が時間に内包されるという場合です。

経験的には、記号は時間とともに変化、生成すると考えられますが、これは、時間の部分集合として記号を考えた場合です。これをDの身体に置き換えて考えてみましょう。Dの身体はDの身体のレベルから時間の作用を受けていると言ふことになります。身体を定位するための原理としてのDの身体は記号外の時間の作用を受けているという仮定、つまり公理としてのDの身体にはすでに時間が内包されているという系が考えられます。時間内存在としての記号系⁽¹⁵⁾とでも言うものです。⁽¹⁶⁾

次は記号に時間が内包されるという考え方です。

この一見、不思議な考えも時間を考えるヒントになります。記号の部分集合として時間を考えるというものです。時間の生成を考えると、あるいは、時間を不可逆な時間として考えるときでさえ、概念としてしか把握できません。例えば、時計。時間の秩序を物理的な空間に還元することで成立しています。しかし、これは、概念です。時間というSEを数列を用い、空間に差異を持ち込んでいるのです。時間というSEは時計というSAによって記号となり、記述され、初めて存在するのです。

また、現象学の時間概念と論理的な深いつながりがあるようです。つまり、記号の根拠として自我を考えると時間を順序づけるのは、SAとしての自我とSEとしての時間という構造です。(現象学的文体の時間)したがって、記憶、回想、体験、経験……と言った概念に内包される時間が記号の部分集合として存在することを物語っています。

記号内存在としての時間系です。⁽¹⁶⁾

最後に、記号と時間が等しいと言ふ場合についてです。

これは、時間と空間を等式で結びつけたミンコフスキー4次元連続体を考えると理解可能かと思えます。1秒11cmメートルという時間と空間を等式で結ぶことにより、時間は距離で記述可能になり、距離は時間で記述可能になりました。これを記号と時間の関係

に置き換えると記号は時間で記述可能であり、時間は記号で記述可能であるというようなならかの可能性があるということです。ただ、物理学での成功は光速という絶対基準があったからこそ可能であつたので、現在のところ可能性としてしか提示できません。¹⁷⁾

身体の記号論的構造

本節では身体の記号論的な構造を考えてみることにします。

まず、Dの身体についてです。「Dの身体」を「精神と肉体」としておきます。¹⁸⁾精神が肉体を規定したり、定義をするということから、精神をSA、肉体をSEとおきます。そこに現れた記号がDの身体です。なお、このDの身体には時間が内包されているとおきます。¹⁹⁾

次にCの身体について考えます。日常的な身体の動き、ヨガの修行をする身体とか、あるいは、拷問される身体などを考えると、おそらく、身体の動きは人類の歴史上、無数にあつたものと思われまふ。これまで現れたことのない身体の動きが出る可能性があるという意味で、論理的な可能性としては身体の動きは無限にあると言ってもよいかも知れません。

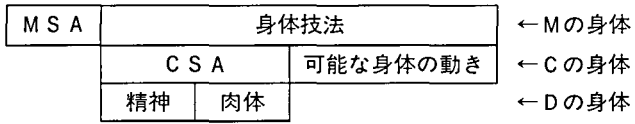
Cの身体はDの身体をCSAとし、可能な身体の動きをCSEとする身体とおきます。

最後にMの身体についてみておきます。さて、Cの身体には可能な身体の動きがありますが、ある種定型的な動きが観察できます。ここに実証性の水準を合わせたのが身体技法という概念です。この

定型的な身体の動きを文化人類学では身体技法と呼んでいます。²⁰⁾身体技法には、時間概念が内包されています。この関係を記号として定位しておきましょう。さまざまなDの身体がさまざまな身体の動きの可能性と交わり、反復する回数が増えたとき、身体技法が生まれます。この身体技法は、Dの身体の動きの可能性の部分集合であり、組織化であり、定型化であると定義できます。²¹⁾Dの身体と可能な身体の動きから構成されるCの身体をSEとする新たな記号として身体技法が考えられます。さて、この新たな記号をMSEとする記号を考えてみます。つまり、Dの身体と可能な身体の動きから成る身体をSEとするMを考えるわけです。MはSEにある記号(=SAとSE)が入り込んでいる構造でした。Dの身体と可能な身体の動きによつて生成した身体技法を一つの記号、SEとし、それにある種の言説、SAを加えるとMとしての身体が成立します。Dの身体と可能な身体の動きはMの身体のSEを形成することになります。さらに、身体技法は一つではありません。複数の身体技法があります。身体技法の積分がMの身体のSEの構成要素なのです。

MSAとセットになったMの身体が誕生しました。
Dの身体からCの身体へ、そして、Mの身体へ身体が生成したわ

図4 身体の記号論的構造



けです。

(図4) 簡単にここまでの関係を図示しておきましょう。

身体の三様相

ここでは、Mの身体について考えてみましょう。⁽²²⁾ 本稿では、以降、Mとしての身体を身体と呼ぶことにします。

ここで、二節で見た記号の三様相を身体に応用してみます。ただし、記号の三様相ではDを対象としていましたが、DはMSEのことですから、ここでは、Dではなく、Cの身体をMSEとして考えます。

まず、身体の固記号について考えてみます。

MSEがどんなに変わっても記号の構造が変わらないのが固記号でした。MSEについての言説、すなわちMSAが不変という構造です。しかも、非対称で、一方向です。MSEとしての身体を定義、規定するのが非対称かつ一方向という身体です。いくつもの身体があります。労働する身体と性的身体を考えてみましょう。ここで労働する身体は、労働者という概念が誕生する以前の労働者とい

う意味で、原一労働者と名付けておきます。また、性的身体としてはストーキングされる身体を考えてみるとどうでしょう。これらの身体ではいずれも自身の身体を定義、規定するのは他者であり、しかも非対称で一方向です。また、MSAはMSEからは遡及できません。遡及禁止の原理が固記号の身体には作用しているのです。⁽²³⁾ 固記号の身体を α 身体と呼んでおきます。

次に身体の閉記号について考えてみます。

閉記号はDSAとDSE、MSAとMSEが相互に交流する記号でした。D内部でも、Mのレベルでも豊穡なる関係があります。たとえば、近代の身体です。自身の身体の定義、規定は自身の身体によって行われます。また、自己は精神の内部に宿ります。DSAとDSEは双方向流し、MSAとMSEも双方向流します。自身の肉体は精神と交流し、その身体は自身を定義するMSAとも豊かな関係をもちます。ここでの労働する身体は階級意識に目覚めた、資本家をはつきりと見据えた、労働者でしょう。また、性的身体は恋愛する身体が典型です。この閉記号の身体を β 身体としておきます。ちなみに、 β 身体は記号内部で、すなわち、身体内部で無限に生成することを指摘しておきます。

最後に本稿の中心概念である身体の閉記号について考えてみます。MSAとMSE、DSAとDSEが自由に切断、接合し、他の記号を必ず必要とするのが開記号でした。これを身体に当てはめてみま

図5 身体の様相

系	記号構造	MSAとMSEの関係	性質	身体モデル
α	固記号	$MSA > MSE$	MSAは不変でMSEのみ可変	α 身体
β	閉記号	$MSA \leq MSE$	MSAとMSEは相互に作用	β 身体
γ	開記号	MSA / MSE	MSAとMSEは無関係に接続	γ 身体

身体モデル	M	D
α 身体	他者が定義、規定する身体	精神<肉体
β 身体	自己が定義、規定する身体	精神>肉体
γ 身体	差異が定義、規定する身体	精神/肉体

しよう。精神と肉体は切断され、他の身体と自由に結合する、いわば、解体された身体とでもいべき身体です。身体のDSAとDSEは無関係で、MSAとMSEも無関係です。²³ 身体の定義、規定が不定、もしくは未定の身体。もはや、自己の肉体は自己の精神とは無関係に他者の肉体と関係し、自己の精神は自己の肉体とは無関係に他者の精神と結びつく身体です。労働する身体では、イメージしにくいのですが、コンピュータ・ソフトのプログラマーというのはどうでしょうか。性的身体は乱交というのはどうでしょうか。この身体を γ 身体と呼んでおきます。構造を自由に解体、再構築、接続、切断、越境する身体。精神と肉体の切断、Dの精神も肉体

も、また、MSAとMSEは自由に接続、切断するため、記号外部を求めて無限に生成します。

これを図にすると次のようになります。(図5)

舞踊する身体

さて、ではここで、すでに芸術学の対象である舞踊する身体について考えてみましょう。

舞踊する身体は「美」を層の高いCSEとする「演出家の創始した身体技法」と定義できます。²⁴ では、このとき、舞踊する身体は誰のものでしょうか。

舞踊家の個性という表現を信じれば β 身体であるし、演出家の演出という側面に注目すれば、より α 身体的特徴が現れます。

熟練した舞踊家は舞踊する身体の部分の動きまで精神はコントロールしているのででしょうか。おそらく、無意識に肉体が反応しているのではないのでしょうか。つまり、肉体は精神からはもはや、独立に、自律して動いているのです。

舞踊する身体は「複数の身体技法からなる肉体の自律的な運動」と捉えることが可能ではないでしょうか。

ところで、舞踊と他の芸術との差異は、DSEがMをSAとするいわば、C2としての身体の中でも生き続けていることです。Dの

肉体が同時にC2のSA、すなわちDSEがCSA2でもあるので
す。

DはDSEのみ、MSAは他者II演出家により生成するCSA2
としての身体は「自律的な運動」という定義を内包しています。つ
まり、舞踊の記号構造は、まず、DSAとDSEの乖離を、MSA
とDの所有者との乖離を物語っています。

もし、この定義が可能なら、その時の身体はβ身体でもなく、α
身体でもなく、まさにγ身体です。

再度確認しておきますが、舞踊する身体は「複数の身体技法から
なる肉体の自律的な運動」です。舞踊家自身の精神と肉体は切り離
され、これに言及するMは舞踊家自身によっては生成せず、演出家
という他者によって生成します。

さらに、Dの肉体が同時に表現の素材でもあるという特質から、
肉体が鑑賞者という他者のまなざし、聴覚により他者の心、魂と自
由に接続可能です。鑑賞者という他者の存在によって初めて表現行
為は構成できます。他者の存在を前提とした身体技法として舞踊す
る身体は存在します。舞踊する身体には鑑賞者という他者が必要なの
です。⁽²⁶⁾

Dの精神も肉体も、あるいはMSAとMSEは自由に接続、切断
するため、記号外部を求めて無限に生成するのがγ身体です。

舞踊する身体はどうでしょう。

Dの精神と肉体が切り離されていること、MのMSAが自身より
も他者によって生成するという乖離を考えると舞踊する身体がγ身
体であることを示しています。

舞踊する身体はまさにγ身体の典型です。

闘う身体

それでは、いよいよ闘う身体です。さて、闘う身体はいつたい誰
のものでしょうか。

まず、闘う身体には必ず他者が存在します。⁽²⁷⁾ 他者の身体技法（攻
撃）に対して自己の肉体が反射的に反応する。この連鎖が闘う身体
です。⁽²⁸⁾ これは、身体技法の中心、身体技法の制御は社会でも、自身
の精神でもないことを意味します。闘う身体における肉体の組織化
された動きとしての身体技法は精神を通過せずに反応しているの
です。

では、このとき、身体は誰のモノでしょうか？

精神と肉体の関係はとりあえず、切り離されています。これも前
節の舞踊する身体と同じです。さらに闘う身体は肉体が他者の肉体
の動きに反応しています。

また、闘う身体は身体技法の積分ではないでしょうか。いくつか
のまとまった身体技法の組み合わせによって成り立っています。闘

う身体は身体技法の積分です。「舞踏する身体とは複数の身体技法からなる肉体の自律的な運動である」という定義の主語を「舞踏する身体」から「闘う身体」へと変更してみると「闘う身体とは複数の身体技法からなる肉体の自律的な運動である」と定義できます。

舞踏する身体と闘う身体は、 γ 身体として同じ言説に立ち現れたのです。

あえて、このときの精神を設定するとすれば、遠くに「勝つ」という一点を設定し、中心を持っている構造を考えればよいでしょう。記号構造をマクロに見れば、CSEが「勝つ」という記号構造であり、この位置に「美」を置けば、舞踏の記号論が成立するのではないのでしょうか。

なお、闘う身体のMSAには二つの系譜があります。

一つの系譜として、創始者の身体は別として「身体技法の継承」が基本にあり、ここでも舞踏のMSAと同じ他者となります。他者が自身体のMSAに作用しているのです。

また、もう一つの系譜として、闘う他者の身体が自身体のMSAを形成するという系譜があります。攻撃に対して、受けという身体の動きがそうです。これは闘う身体技法の制御、中心、定義するモノが自身の精神でないことを示しており、身体技法は他の身体技法との差異、戦いにより生成するという事実により近いものです。肉体は自身の精神ではなく、他の肉体に反応します。つまり、差異

により生成するのです。身体技法は他の身体技法に精神とは無関係に反応するのです。後者の系譜は、舞踏する身体より、より他者性を物語っています。

DSAとDSEの乖離、MSAとMSEの乖離こそ、 γ 身体の特徴です。

闘う身体は舞踏する身体と限りなく近いのです。

むしろ、闘う身体の方が舞踏する身体よりより純粋な γ 身体といえるかもしれません。他者を要請する可能性がいくつかの点で闘う身体の方が開かれているからです。たとえば、他者との交差の瞬間を見てみましょう。舞踏が他者を要請するのは常に舞踏者の身体技法の開始によつて始まるわけです。つまり、舞踏する身体とその身体が接続する他身体である鑑賞者とは非対称です。ところが、闘う身体と闘う身体はどちらがゲームを開始してもよいという意味で対称だからです。

また、身体技法が展開している時間中、自身体に対する他身体からの関わりは圧倒的に闘う身体の方が多いからです。これらの観点からすれば闘う身体の方がより純粋な γ 身体と言えるでしょう。

闘う身体技法を「複数の身体技法からなる肉体の自律的な運動である」として捉えるとき、闘う身体と言説は限りなく舞踏の言説に近づきます。闘う身体を舞踏のように語る条件が γ 身体を構築することによって可能になったのではないのでしょうか。

さらに、「闘う身体」を考察することでウイトゲンシュタインの「痛み」、現象学の「他者」、芸術学への記号論の応用等さまざまな可能性に出会えるのではないのでしょうか。このテーマにはこれまでの知の形式を突破する可能性があることを信じ、今後も研究を深めていくことしたいと思います。

注

(1) 闘う身体の中でもフルコンタクト空手の身体を想定しました。「他者」、「痛み」が要素としてあり、私にとっても空手は十年くらいのつきあいがあるからです。

(2) 丸山圭三郎は、『文化記号学の可能性』（夏目書房、一九九三）四一四―四六頁で記号論をコミュニケーションの記号論、意味作用の記号論、意味生成の記号論と大きく三つに分類しています。

久米博は「記号発生の力学 まえがきに代えて」『記号学研究 15』日本記号学会編（東海大学出版会、一九九五）で、「現代記号学の源泉としてのソシユールとパース」六頁と位置づけ、記号論を二項関係とするか三項関係とするかを分類の基準としているようです。本稿は、ソシユール（二項関係）からR・バルト（意味作用の記号論）へと続く系譜上で展開しています。

(3) R・バルト著、佐藤信夫訳『モードの体系』（みすず書房、一九七二）とりわけ、「第3章 物と言葉の間」四六―六四頁によった。

(4) 巨明志『記号論と社会学―記号論の彼方／外部としての権力―』（広島修道大学研究叢書、一九八六）一五頁。

(5) ソシユールは「概念と聴覚映像との結合を記号とよ」び、それぞれを「所記と能記にかえることを、提唱」しています。F・ソシユール

著、小林英夫訳『一般言語学講義』（岩波書店、一九八四）九七頁。なお、日常生活でいう記号は記号論で言うSAに近いことを巨が述べています（前掲書二〇頁）。なお、ソシユールの提唱した記号はこのSAとSEとがセットで記号であり、しかも、SEは概念です。

(6) この例では「植物のバラ」を時空に定位できる自然科学的存在としていますが、このDは形式化のための装置ですから、必ずしも、物理的存在である必要はありません。

(7) 筆者は現象学と記号論は論理的に極めて近い関係にあると考えています。現象学との関係で考えるとここで言うDはエポケーという操作によって立ち現れた「バラそのもの」でしょう。私たちが生きていく世界はMやCという記号のレベルで存在しています。このレベルからMSAやCSEを切断してただDそのものを浮かび上がらせるのがエポケーです。そして、そのDをMSEとするMSAが超越論的自我（主体）です。さらに、そのMSAがSAとして新たなSEと接合していくとき、そこに、現象学的還元を施された新しい世界が誕生します。

また、ノエシスをSA、ノエマをSEと考えることもできます。ただ、筆者の考えでは、記号論は空間的な概念志向が強く、現象学は時間的な概念志向が強いように思います。さらに、いくつかの記号の形式の中で特別強い条件を加えたのが現象学ではないかとも考えられます。

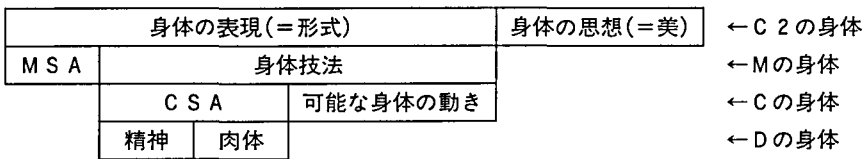
(8) 金田晋「現象学運動の展開」『現代思想』Vol.1（青土社、一九七三）一四四頁「現象学が記号論、言語論に大きな影響を与え」たという歴史的事実は、記号論と現象学の近さと差異を両義的に表しています。

(9) 橋爪大三郎「ダブル・リアリティ」『橋爪大三郎コレクションI』

- (9) 勲草書房、一九九三—三〇頁からヒントを得て、「志賀直哉の『城の崎にて』をめぐって—私小説・記号論・視線のパロッキー—」『文学空間 第二号』（広島大学文学の会、一九九九）で考察したことがあります。文学作品の語る主体の視線に対象の記述の可能性を探った内容です。
- (10) 生活経済学第14回研究会（一九九八・四・二五）で「生活者」の可能性—現代消費社会における「生活者」の記号論的位相について—という発表を行い、そこで記号の三様相を初めて発表しました。もともと、集合と個人、経験と合理という対立する二軸を交差させ、それぞれの象限の特徴から第一象限は慣習、第三象限は効用、第四象限は差異という消費行為の判断基準を三つ考え、これらをMSAとする記号を考えました。
- (11) 外部を志向する特性は局所の記述と全体の記述の新しい可能性を示しています。このときの文体は現象学的な文体ではなく、差異を記述するという記号論的文体ということになります。
- (12) 第41回広島芸術学会例会（一九九八・一一・一三）の後、金田晋教授から記号論と時間との関係についてご質問をいただき、新たに考察したものです。
- (13) J・アタリ著、蔵持不三也訳『時間の歴史』（原書房 一九八二／一九八三—一九八六）、真木悠介『時間の比較社会学』（岩波書店 一九八一）等がある。
- (14) 記号化すると①記号∩時間 ②記号∪時間 ③記号∥時間 となります。
- (15) これをわかりやすくするため、数式化しておきましょう。記号をSAとSEの写像関係と捉えてみます。SAを説明項、SEを被説明項とすると写像関係が成立するからです。この関係は対一の場合もあれば、多対一の場合もあります。するとこれは簡単な数式 $F(S$
- A)∥SEで表せます。また、MはF(DSA、DSE)∥MSEともなります。身体技法という時間を内包した概念を考えるために、時間を一様な独立定数として両辺にtを加えてみましょう。つまり、 $F(D+t)∥MSA+t$ と考えるのです。そして、このtがtV0の場合のとき、身体に動きが加わったと考えてみます。時間が外から持ち込まれた場合の一つの解法です。しかし、このtというのはスマートな解ではありません。もう一つの解法はFという関数そのものを時間と考える方法です。そうするとある記号のレベルが変わるということが関数Fそのものの変化を表すということになります。一つの記号が次元の違う記号になる場合、ある種の関数を想定するという考えです。これも、時間は記号に内在する要素ではなく、記号の外の関数概念ということになります。
- (16) (7)でも述べたように現象学の基本概念は記号論に厳しい条件を課した状態として考えることができるというのが筆者の考えです。
- (17) この絶対的な基準が自我、あるいは身体かも知れません。
- (18) とりあえず、近代の二分法によりました。伝統的な身体モデルからスタートした方が本稿の効用が増すと考えたからです。
- (19) 記号と時間の関係はいくつもの可能性があります。身体技法は動きという時間概念を内包しています。ところで、Dの身体は論理的に導いてきた身体であり、初めは静態モデルとして考えたのですが、そうするとDの身体は静態モデルで、身体技法は動態モデルということになり、うまく接合できませんでした。つまり、Dの身体から身体技法へはどうしても時間という概念が必要になるからです。この時間の誕生という大問題をさけるために暫定的な条件づけとして初めのモデルに時間を内包させました。
- (20) 身体技法はもともとM・モースの用語です。「歩行中の腕の位置や足の運びも、単なる個人的・心理的運動ではなく、集合的・社会的な

- 特質を形成している「見田宗介、栗原 彬、田中義久編『社会学事典』(弘文堂 一九八八)とあるように、元来、身体の外からの作用の可能性を含んだ概念です。
- (21) SAとSEの関係は多対一の関係も含んでいるため、いくつかの定義が可能です。
- (22) これも、現象学的な見方をすれば、生活世界においては、まず、Mとして身体は存在しているということになります。
- (23) 第7回数理社会学会大会(一九八九・三・一一)で「文学の基礎に関するいくつかの仮定」という発表を行い、そこで神話や昔話、伝承という古代文学の読者による作者探しの禁止について発表したことがあります。
- (24) ただし、記号としての緩やかな中心はあります。
- (25) C2の身体のSAを表現(II形式)、SEを思想(II美)と考えました。図にしておきます。(図6)
- (26) 本稿では触れませんが、コミュニケーションの記号論での展開は可能です。
- (27) 自分と闘うというのは比喩です。空手は文字どおり闘う身体です。
- (28) 意識がなくても肉体が反応し、闘うことは可能です。ボクシングではしばしば起きていますし、空手でも側頭部に強い蹴りを受けるとうしろしたことはしばしばあります。
- (29) 「闘う身体はどこで語ればよいのか―武道

図6 身体の思想と表現



の身体の記号論的可能性に向けて―」広島修道大学社会学研究会(一九九八・一一・二八)で発表したことがあります。

(おおよま・とものり 広島貯金事務センター)